

第26回生駒市総合教育会議 会議録

1 日 時 令和5年7月24日(月) 午前10時～午後0時

2 場 所 生駒市役所 大会議室

3 協議事項

(1) 第3次生駒市教育大綱の策定について

4 市側出席者

市 長 小 紫 雅 史

副市長 山 本 昇

5 教育委員会側出席者

教育長 原 井 葉 子

委 員 (教育長職務代理者) 飯 島 敏 文 委 員 神 澤 創

委 員 レイノルズあい 委 員 伊 藤 智 子

委 員 古 島 尚 弥 委 員 中 川 義 三

委 員 吉 尾 典 子

6 事務局職員出席者

教育こども部長 鍬 田 明 年 生涯学習部長 八 重 史 子

教育こども部次長 松 田 悟 教育総務課長 山 本 英 樹

教育総務課課長 松 本 芳 樹 教育指導課長 花 山 浩 一

幼保こども園課長 大 畑 勝 士 幼保こども園課指導主事 喜 多 美 枝 子

幼保こども園課指導主事 湯 川 祐 美 子 こども総務課長 武 元 一 真

子育て支援総合センター所長 角 井 智 穂 生涯学習課長 清 水 紀 子

図書館長 西 野 貴 子 図書館課課長 錦 好 見

スポーツ振興課長 西 政 仁 教育総務課課長補佐 桐 坂 昇 司

教育指導課課長補佐 中 田 博 久 教育政策室長 日 高 興 人

幼保こども園課課長補佐 小 林 奈 津 子 生涯学習課課長補佐 井 川 啓 一 郎

図書館南分館長 谷 江 真 美 子 生駒駅前図書室長 入 井 知 子

スポーツ振興課課長補佐 大 畑 由 紀 教育政策室(書記) 三 室 哲 哉

教育政策室(書記) 松 田 美 奈 子 教育政策室(書記) 杉 山 史 哲

7 傍聴者 2名

午前10時 開会

○開会宣告

○市長挨拶

小紫市長：今回は、「第3次生駒市教育大綱策定について」が協議事項となる。第1次教育大綱は相当きちんとしており、それを活かしていく方向で微修正により第2次教育大綱を策定したが、第3次教育大綱はどのように策定していくのか。この4年間の大きな変化として、新型コロナウイルス感染症の感染拡大や国際情勢の不安定化が増したということ、そしてAIやデジタル化への非常に速いスピードでの進展、また、コロナに伴う不登校児の激増等、様々な要素があり、これらを第3次教育大綱に入れていくのか、入れていくとしたらどういう形で入れていくのか。更に、教育大綱に基づいて、各学校運営協議会での校長先生の経営方針や、学校の様々な教育方針、また、毎年の教育委員会のアクションプランの中で、予算と紐付けて、1年ベースでどんなことをしていくのか、また、待機児童も含めた子育ての計画をつくっているの、教育大綱の位置づけや、社会教育との関係性等、文科省や国際的な動向も含めて、少し広い視点での忌憚ないご意見をいただければと思う。

○協議事項

(1) 第3次生駒市教育大綱の策定について

- ・第3次生駒市教育大綱の策定について、日高教育政策室長から説明【資料1】から【資料9】

小紫市長：フォーラムやワークショップを開催して、市民や子どもの意見を聞き、市役所内でも議論を重ねていくことを、引き続きやっていく訳だが、今までも様々な関係者に話を聞き、また、聞くだけではなく、全て教育大綱をつくる資料として繋がっていくという姿勢や方向性を今回の資料は示してくれている。また、前回の総合教育会議においても、ブレインストーミングという形で、大変ありがたいご意見をたくさんいただいた。

本日、大きく議論したいのは3つある。1つ目が、教育大綱の基本理念『「遊ぼう」「学ぼう」「生きよう」みんなでいこまを楽しもう』の一番大きなビジョン的なものを、この4年間の社会情勢等の変化も踏まえて、変えていくべきものであるかどうか。

2つ目が、基本方針について。ここは、第1次の時に、かなり議論をして、相当簡潔にエッセンスを抽出して詰め込んでいるので思いもある。この3つの基本方針が、子どもの成長に応じて、<子育て・就学前教育><学校教育

><生涯学習>という分け方をしているが、国の教育振興基本計画においても、年齢を問わない、その機能別に5つの方針を示したが、そういう形で、見方を変えて、基本方針を定めていくということもあるのではないか。

3つ目が、今回はかなり徹底的にいろんな方法、機会、手段を駆使してみんなの声を聞きながら進めていく、そのプロセスや意見の聞き方について、議論させていただきたい。

教育大綱と他の計画との関係として、総合計画もあるし、教育に関する他の計画も、学校で定める方針もある。例えば、教育フォーラムでの『大綱のキーワード100個』を、教育大綱にそのまま載せるとなると、なかなか難しいが、毎年作成するアクションプランだったり、学校の経営方針の中に載せていくのは良いのではないかという話があるかもしれない。

それでは、3つの基本方針を、少し違う視点から見たものに変えていくべきか、また、キーワードとして絶対入れていくべきであろう言葉等について、ご意見をいただきたい。

吉尾委員：現教育大綱では、年代別に分けて、それぞれのステージでの基本方針を定めているが、それぞれの学びが繋がっていくことが大切だと思う。人間は生まれてから死ぬまでずっと成長し続けるもので、学校が終わったからもう学ぶのはおしまいではない。一生を見据えて、自分自身も、子どもたちも、周りの人も、その年代での発達課題や成長を意識して学ぶべきであり、緩やかな人もいれば、急速な人もいてカーブの仕方は違うと思うが、それぞれの年代で発達していく、獲得する成長というものもあると思う。学ぶことは、分からないことが分かる喜びであり、それを人に伝える喜びである。基本理念にもあるように、学びを楽しいものにするためには、どんな方法があるのかを表すことができれば、と思う。

小紫市長：前回のフォーラムのときに、前教育委員の上田先生にワークショップをしていただいたが、その中で、学び方を学ぶ、学び続けようという意欲やモチベーションを、子どもたちだけでなく、全ての人が持つようなメタラーニングシティとしての実現を、生駒市が目指すべきことを強くお話されていた。生涯学習は、0歳から亡くなるまでなので、今の基本方針の3本柱は、年齢が大きくなるようになっている。学び続ける、成長を続けるための意欲や思いを持ち続けて、自分で能動的にアクションを起こす人を増やしていくことが教育だということであれば、今のたてつけから、少し変えていくことも、また、その根拠にもなるのかと思う。

飯島委員：【資料7】に、基本方針について、<子育て・就学前教育><学校教育><生涯学習>をきっちり分けずにできないかというような意見が出されている。本来の意味での生涯学習は、生まれたときから最後までという段階を含むものというイメージがあるが、その一方で、生涯学習として提供されているも

のが、主に成人教育、社会教育の分野に重点化されている。そうすると、世間のイメージでは、生涯学習というと、＜子育て・就学前教育＞については就学前、＜学校教育＞については小・中学校、生駒市については高校・大学の機関がなくて、＜生涯学習＞と、ある人の成長過程を3つの区分に分けたような計画であるというイメージが出てしまっていて、3本の柱になりにくいという印象がある。これを一体的なものになるようなキャッチフレーズを1つ置くことによって、3本の柱を一体化する、あるいは3本の柱の中にそれぞれ焦点化した課題、例えば ICT や、人づくり等をクローズアップさせることによって、3つに関わる視点での再構成するような見せ方が重要なのではないかと考える。

小紫市長：1つのキャッチフレーズを置くことで、整理していくと、基本理念に追加していくようなものが見えてくるかもしれない。その上で、今の3つの柱を生かした形で書くのか、もう少し変えていくのかはあるが、少し踏み込んで言うと、国の教育振興基本計画では、ずっと学び続けて成長を続けるというものの下に、5つの基本的な方針を出していたかと思う。グローバル化、誰1人取り残さない、地域や家庭で共に支えあう、教育デジタルトランスフォーメーション、計画の実行性確保のための基盤整備の話の5つがあり、こういう形で生駒市の基本方針として立てていくのが良いかどうか、ベースとしても良いが、この面をもっと押していこうとか、そのあたりいかがか。

伊藤委員：分からないことが分かるようになる、それを人に伝える、生涯学んでいくということが、人が成長することだと思うので、小学校、中学校の現場でも、子どもたちも学んだことをアウトプットしていく機会が増えてきていて、とても喜ばしいと感じている。ここで重要となってくるのが、子どもの力を信用する、子どもを信頼して任せる親や先生の態度だろう。子どもたちも、自分が1人の人として成長することを周りが認めてくれる、自分の努力を受け入れてもらえるような環境を得ることで輝くことができる。先生も子どもとともに学び、子どもの発想を受け入れていくなかで、向学心や学ぶ意欲を再燃させることができるだろう。先生が学ぶ楽しさを伝えれば、子どもたちもそれを受けて輝いていく。ライフステージは違うが、子どもも学ぶし、先生も学ぶ。相互に刺激し合い、楽しく、輝きあえるような教育が、1人1人を大切にすることの中身である。その延長線上には、子どもの主体性、自発性が育っていき、そして子どもがその地域、自分の学校、クラスに貢献する、経験することで、更に前向きに好奇心も出てくる。そういう良い循環が待っていると思う。そういうことを大綱に反映させることはできないか。

吉尾委員：キーワードを考えたときに主体性という言葉が頭に浮かんでいる。「あなたの人生はあなたのもので、あなたの人生をより良く生きるのは、あなた自身」である。いろいろな生き方があって、それを誰も否定されない、でも自分が

幸せになるためにどうしたらいいかということを常に考えていく。自分の人生を考えたら、成長していくことが重要になるし、キーワードとなるように思う。

小紫市長：あえて少し厳しい環境に自分をおいて、学びを続けて、いろんな経験を経て、行動に移し、具体化していくようなことを、常にやっていかななくては生きていけない、よりそういう時代になっていくので、主体性というのが更に重要になる。重要な一つ概念として出すというのはあるのかもしれない。

飯島委員：主体的な学びというのは、学習指導要領の中でも登場するが、子どもたちを主体的な存在に育てるためには、地域、学校、家庭が共通認識として共有することが重要。ただ、具体的にはどういう部分で、どういう態度が示されたら、主体的であるのかについては、いろんな感じ方、考え方があってと思うので、これが主体的であるというステレオタイプなイメージを決めてしまうのではなく、主体的であるためにはどうすればいいのかということ、例えば各小中学校にある学校運営協議会などの議論を通して、共有することによって、家庭や地域と学校が主体的な子どもたちを育てるための基盤の最も重要な部分をつくっていくのがよい。基盤があって、3つの柱があって、その柱をくくる一つのフレーズがあるというような形で、教育大綱を再構築すると、現教育大綱では、一目ではわかりにくいところがあるので、それを、例えば、概要版と本文のような形で、概要版の方にはイメージを共有するための図解のようなものを含め、細かく定義をするというような形で共有していくのが良いのではないか。

小紫市長：だいぶ絞り込んで、現教育大綱ができたが、それでもなかなか読んでいただけないところもあるのかもしれないが、何より、つくった後に、どのように活用して、何をしていくのか、そちらの方のコミュニケーションが、重要かと思う。教育大綱の概要版をつくっていくことも、当然、考えていきたい。

レイノルズ委員：第1次教育大綱に関わっていた者として、思い入れがあるが、今見直してみても、主体性に関しても網羅されていると思っている。きちんと、主体的に学び、挑戦を続ける、たくましい「いこまびと」の育成ということを掲げていて、ここに書いてある内容が、第3次教育大綱にそのまま載せても、全く違和感がないと思っている。教育大綱に何を書くかということより、それをどうやっていくか。それぞれの解釈や、学び方をどう繋げていくかということが大事かと思う。

国の教育振興基本計画のこの5つの基本的方針は、全体的に学校教育の方での軸が主な内容だと感じる。生駒市は、図書館の活用や、生涯学習も決してシニアの方だけでなく、お子さんに対しても社会人に対しても、様々な取組をして充実させているし、また、就学前教育に関しても、たくさん取組をしているので、そこが逆に網羅されなくなったら、もったいない。決して、3

つの柱が分かれているとは考えておらず、ポイントとしてとても分かりやすいので、より繋がりをつくるためにどう表現したらいいのかというところは工夫が必要だと思うが、やはり柱としても、しっかりしているのではないかと考えている。

小紫市長：文科省が作成した教育振興基本計画をベースにすると、学校教育にかなり寄っているのでは、生涯学習や就学前教育がもれ落ちるのではないかととも思う。例えば今、生駒市では子ども・子育て支援事業計画等の小さな子どもの様々な取組を規定する計画があって、そちらにある程度小さい子どものことは書いていき、もう少し大きな子をイメージした教育大綱にするのかという議論についても、考えていかないといけない。生涯学習の方でいうと、現役世代以降の方への事業が多いという傾向がある。大きな課題として感じているのは、中学生、高校生たちの生涯学習の機会が非常に少ないというのがある。

日高教育政策室長：すみ分けの話が出たので、今の段階で、こちらで押さえているところを申し上げておくと、教育振興基本計画の26ページ中段、子ども政策との連携という項目がある。ここに書いてあることは、子ども基本法が定められて、国はこども大綱を定めることとされている。そして、「学び」に係る政策と「育ち」に関わる政策という表現をしており、「学び」に係る政策が、国では教育振興基本計画であり、本市では教育大綱で、「育ち」に係る政策が、国ではこども大綱であり、本市では、子ども・子育て支援事業計画であるという整理を行った上で、そういってもきちんと割れずに重複する部分は当然あるということで、脚注にも、例えばという形で、子どもの居場所づくりの取組や、いじめの防止対策、子どもの意見を直接聴く機会を持つということは、両方にも共通したところで連携を図るような書き方をしており、そういう意味では「学び」に寄った方は教育大綱で書くし、「育ち」に寄った方は、子ども・子育ての方に書くという区切り方は1つあるのかと考えている。

小紫市長：これまで、生駒市として良い形と思えるものを採用してきたが、こども家庭庁が設立されることで、こども大綱をつくったり、体制を見直す必要があるのではないかと。今後、行政側で議論を重ねながら、教育と子育てを支える体制を整えていきたい。

原井教育長：第2次生駒市教育大綱と、国のこの教育振興基本計画とを比較し、多くの共通点がある。教育振興基本計画の5つの基本的な方針で、①の方針、人材の育成が、本市の教育大綱の特色の一つに、人づくりとまちづくりというワードが出てきているが、就学前、小学校・中学校、生涯学習と区切るこの考え方を、人づくりというカテゴリーで通せないかと考えていた。そうすると、教育振興基本計画の目標1から6あたりが、具体的な内容になってきて重なってくる。

もう一つは、教育振興基本計画の③の方針で、地域や家庭で共に学び支え合

う社会の実現がある。これが、まちづくりという言葉に当てはまるかどうかはもう少し考えなければならないが、協創やまちづくり、地域や家庭が関わっていくということを1つのカテゴリーにして、第2次教育大綱の見直しを図れないか。そうすると、就学前の段階でも人づくりに関わっていくところを、家庭教育も含めて、教育大綱の中に入れていく。それ以外の福祉的なところをまた別にリンクさせていくという考え方もできるのではないか。

小紫市長：今も教育大綱に就学前教育として入っているし、教育委員会の方ではかなり就学前の子どもたちのこともやっているの、教育大綱の中に子ども大綱的な要素も全部入れることも一つの考え方であると思うし、国のように分割してつくることもあるかもしれないが、国の動きも含めて、もう一度整理をさせていただきたい。

大きな立てつけ、この4年間の変化も踏まえて、今の教育大綱に足りないキーワードをいただければ、それが次の教育大綱作成に向けてのヒントになると思うが、いかがか。

神澤委員：誰一人取り残されることのない教育体制を実現することが重要になると考える。年代を超えて、子どもも大人も一緒に、同じ立場で同じ体験を共有して、誰一人取り残されないとイメージができる場ができればすごく良い。例えば、ヤングケアラーなどの問題についても、経済の問題や家庭の問題、学校の問題等が複雑に絡み合っている。誰一人取り残されることのない、対象は全ての年代、全ての人にきちんと向いていることが分かるようなキーワードはないか。

小紫市長：主体性というような言葉が先程あったが、まちづくりとして誰一人取り残さないというのはもちろん非常に重要な話で、取り残さないことと、きちんと支援するところとはセットで、大切な要素だと思う。また、メンタルヘルスや、社会で活動するにあたって、コミュニケーション能力や対処方法、もう少し心の部分を本文に加えてもいい。

中川委員：学校訪問や園訪問を通じて、子どもたちが遊びながら学ぶことの重要性を認識した。遊びと学びは、大人も同じであると考えており、教育大綱の基本理念にも、「遊ぼう」「学ぼう」「生きよう」の3つを書かれてあり、この「遊ぼう」と「学ぼう」を1つにして、「遊ぼう・学ぼう」と、「自分らしく生きよう」としてはどうか。主体性も含めて自分らしく生きようというのも大事なところかと思う。

あと、ITやAIなどの技術の発展により、人々が個人の中に閉鎖されつつあるので、もう少し繋がろうというのも大事なのかと思う。

教育大綱の基本理念もすごくよくできているので、一つの大きな横断的な話かと考える。

古島委員：シティズンシップという言葉が今ものすごく言われている。特にデジタル・

シティズンシップで言えば、コロナ禍でオンラインの活用や、SNSが発達して、最近では ChatGPT 等も出てきている中で、どのように共存していけばいいのか、どのように活用していくか、子どもたちも大人もどのように向き合っていけばいいのかということは、大きな課題だと思っている。

もう一つ、グローバル教育、英語教育にも力を入れていて、教育大綱にも入っているが、グローバル・シティズンシップという言葉が最近出てきて、英語教育はもちろん、世界中で起こっている課題を今であれば、オンラインの力も使って、世界といかに繋がっていくかということも、もっと必要になってくるのではないかと。そういった海外の世界的な課題を小、中学校の子どもたちであっても、大きな広い視点でグローバル的なことを考えていくことができればよいと思う。

小紫市長：主体性や自己有用感、ウェルビーイングというキーワードと、グローバル教育においては、語学だけでなく、異文化理解や国際協力が重要であるところを少し強めに基本方針に加えていくというのはどうか。

飯島委員：基本理念の『「遊ぼう」「学ぼう」「生きよう」みんなでいこまを楽しもう』というこの書き方は、かなり検討してつくられただけのことはあって、非常に印象に残りやすい、全国的にもユニークな書き方ではないか。これは、このまま活かしていく。また、奈良県内でも半分以上が消滅可能性都市として挙げられているが、生駒市は大阪に近いこともあり、消滅可能性が低い都市として位置づけられているが、コロナ禍も関係して出生率の低下により、これからの子どもたちは少ない人口で、高齢人口を支えていかななくてはならないという新しい事態に対応できる力も精神力も育てなければいけない。

ICT 端末が揃い、ChatGPT が日本でサービス開始されるなど、学校の教育の中で AI を使う機会が出てくると予測される。そうした新しい部分への言及も盛り込んで、先程言及されたこども大綱について、子どもたちの中に、一人の学ぶ人間として実現させていくべきものである。こども大綱と並行するのではなく、教育大綱の中にこども大綱的な考え方を位置づけて、一つに統一していくことがアプローチしやすいのではないかと。

小紫市長：600 人台まで生駒市の出生数が激減した。そのインパクトの大きさと、それをどういう形に変えていくか。今までの教育大綱でも少子化については多少入っているが、少子化時代が異次元化しているのもある。また、生成 AI の話は、大綱では少し触れるぐらいかもしれないが、学校で、これをどう使っていくのか。基本的には、あるものを止めるということではできないので、あることを前提にして、教え方、学び方を変えていかなければいけないことだと思う。あと、こども大綱の話も分けてつくるのか、教育大綱の中により充実させていくのか等も整理したい。

小紫市長：最後、三つ目のプロセスの話で、例えば、この人の話が聞きたいとか、この現場に行きたいとか、そのあたりについてのご意見はいかがか。

伊藤委員：直接誰に聞くかという意見ではないが、児童・生徒、学校の先生方をたくさん巻き込んで、今後話を聞いていくプロセスでやっていくとすると、その結果のプロダクトが教育大綱という形でまとまって、それが Web ページ等で学校現場でも閲覧はできると思うが、せっかく子どもたちも先生も関わってくれるのであれば、子どもたち自身にも、現場の先生にも普段から教育大綱を見てほしい、という思いもある。例えば、みんなが使っているタブレット端末で参照できるようにする、イラスト入りにしてわかりやすい文言にする等で、私達の生駒市の教育はこんなことを大事にしているということが、常に目に触れて思い出せるというような媒体を検討してもらいたい。

原井教育長：その件については、子どもたちがどんな未来を描いていくのかというところに繋がるような示し方で、子ども版教育大綱をつくっている自治体もあるので、検討して、みんなで共有できるものにしていきたい。

小紫市長：概要版をそんな形にしていくということもあると思う。また、作成した教育大綱を具体的に子どもたちの学び等に、どれだけ活かしていくのか、というところはしっかりやっていかないといけない。教育大綱レベルで、細かいことは書けないので難しいかもしれないが、子どもたちが自分の意見が反映されているとか、学校の今年の事業として形になっているとか、そういうみんなの意見から参考にしたことを、きちんと発信しないと、今のままだとやはり響かないので、その辺は工夫していきたい。

レイノルズ委員：確認だが、スケジュールでは、7、8月にワークショップの予定とあるが、現場の先生方の意見というのは、教頭会ワークショップ、校長会ワークショップ、こちらに集約されるということなのか、アンケートということであるのか。

日高教育政策室長：教頭会ワークショップ、校長会ワークショップ等を計画している他に、学校の先生も、600人いるので全員という訳にはいかないが、面と向かった場でのワークショップができればと考えている。

小紫市長：是非、お願いしたい。

小紫市長：大変ありがたいご意見をたくさんいただいた。第1次、第2次教育大綱でかなり議論させていただき、簡潔であるが、非常に良いものだという思いを持って、つくってきた。ただ、この4年間は、社会情勢の変化が、特にあったので、そういう観点であったり、たてつけもまだ必要であれば変えていく余地はある。たてつけ自体は良いけれど、キーワードとして、もう少し前に出していかなければならないこともあるかと思うので、他の計画との関係性も含めて、今後まだまだ議論が必要かと思う。並行していろいろな方のご意見を

聞いていくというプロセスを踏まえながら、中身についても更に議論していきたいと思うので、今後ご指導いただければ大変ありがたい。

○閉会宣告

午後0時 閉会